volume 101
MARCH 2007

HABATAKI
はばたき
UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada,Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS

●CONTENTS●

創立20周年記念事業・公開シンポジウム等……1
国際交流……3
法人化情報……5
著書紹介……7
研究助成採択……7
平成18年度厚生労働科学研究費補助金採択実績……8
平成18年度厚生労働省がん研究助成金採択実績……8
教員の人事等……8
受賞……9
図書館だより……11
今からしよう　生活習慣病予防……13
るんるん健康教室……15
スルガ銀行　寄附講座……16
クラブ・サークル紹介……17
静岡ガイドブック……18
全学防災訓練……18
谷田風土記……19

静岡県立大学創立20周年記念事業

公開シンポジウム
「中国、マレーシア、フィリピン、米国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦」を開催

国際関係学部　教授　西田　ひろ子

平成18年11月18日、19日の両日、本学創立20周年記念事業の一環として、シンポジウム「中国、マレーシア、フィリピン、米国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦」が、東京国際交流館（プラザ平成・国際交流会議場）において開催されました。

本シンポジウムでは、海外に進出した日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦調査の成果報告（平成8年から平成14年度文部科学省科学研究費補助金 国際学術研究及び基盤研究Ａ によるもの）を基に、日本人は文化背景の異なる人たちからどのように見られているか、日本人はそれらの人々をどのように見ているかというテーマで講演が行われました。

異文化間コミュニケーション摩擦調査の成果を報告する西田ひろ子教授

グローバル化が進む中、文化背景の異なる人同士の交流がますます増えてきております。それにつれて、文化の違いによって引き起こされる問題も増え、「多文化共生社会」を実現することが急務であるとされています。本シンポジウムは、「多文化共生社会構築に向け、私たちは今何をすべきか」について考えるきっかけを与えることができたのではないかと考えております。

（なお、本シンポジウムは、平成17年及び18年度科学研究費補助金 研究成果公開促進費により実施されました。）

現代韓国朝鮮研究センターが2つの討議を開催
～「朝鮮半島問題とマスメディア」＆「韓流現象をどうとらえるべきか」～

国際関係学部　助教授　小針　進

現代韓国朝鮮研究センターは、昨年11月に現代韓国朝鮮学会（会長：伊豆見元国際関係学部教授）との共催でパネルディスカッション「朝鮮半島問題とマスメディア」（18日）と、シンポジウム「韓流現象をどうとらえるべきか」（19日）をそれぞれ開催しました。本学で開催された第7回現代韓国朝鮮学会大会のプログラムの一部で、朝日新聞社が後援しました。また、本学創立20周年記念事業の一環でもありました。

「朝鮮半島問題とマスメディア」は、国際関係学研究科の平岩俊司教授が司会にあたり、鐸木昌之・尚美学園大学教授、水野孝昭・朝日新聞社ニューヨーク特派員、山岡邦夫・読売新聞論説委員、塚本壮一・ＮＨＫ中国総局特派員らがパネリストになりました。朝鮮半島情勢への日本マスメディアのかかわりや、北朝鮮や韓国メディアの報道ぶりについて議論されました。

「韓流現象をどうとらえるべきか」 は、一般にも公開され、県民約100名も傍聴しました。パネリストには、韓国ドラマ「チャングムの誓い」に文定皇后役で出演したキャスターの朴正淑さん（現在は米コロンビア大学で研究中）、小倉紀蔵・京都大学助教授、野崎宗利・フジテレビ国際局アジア戦略部専任部長、朴根好・静岡大学助教授、渡邉聡・本学国際関係学部教授が、それぞれ務めました。司会進行は小職が行い、ここでは、韓流現象の意味・評価、肯定的な側面と反作用、文化の序列と自文化中心主義の問題など、パネリストそれぞれの専門分野から議論が交わされました。

「韓流現象をどうとらえるべきか」で発言する小倉紀蔵氏。その右が朴正淑氏ら。

「朝鮮半島問題とマスメディア」と「韓流現象をどうとらえるべきか」の詳しい内容は、『朝日新聞』（平成18年11月23日付）に掲載されておりますので、そちらをご覧ください。

なお、シンポジウム翌日の同月20日、朴正淑さんは本学学生のみを対象にした韓流現象と日韓関係に関する特別講義を本学で行い、国際関係学部学生らに韓流が日韓関係に及ぼした効果などを説き明かしました。

公開シンポジウム
「広域ヨーロッパの将来」を開催

大学院国際関係学研究科　教授　六鹿　茂夫

2006年12月8日、静岡県立美術館にて「広域ヨーロッパの将来」に関する公開シンポジウムが、主催「静岡県立大学創立20周年記念事業実行委員会」、共催「静岡県立大学広域ヨーロッパ研究センター設立準備会」によって開催されました。

まず第一部では、神戸大学の藤田誠一教授が「拡大ヨーロッパ経済とユーロ圏の行方：ユーロは世界の基軸通貨になるのか」と題して基調講演を行いました。ユーロは、欧州諸国間でドル変動の影響を受けずに取引をするために創出された『守る』通貨の性格が強いこと、EUに最近加盟した諸国のユーロ導入には時間がかかりそうなこと、ドルは世界の基軸通貨としてユーロに比べ一日の長があること、などが説明されました。

第一部・神戸大学の藤田誠一教授による基調講演

第二部ではウクライナ平和・転換・外交政策研究所のアレクサンドル・スシュコ博士が「ウクライナ：EUとロシアの狭間で」と題して基調講演を行った後、トルコの元外務省戦略問題研究所長のムラト・ビルハム氏とモスクワ国立国際関係大学のアレクサンドル・ニキーチン教授が各々「トルコのEU加盟は実現可能か」と「大国ロシアは『拡大ヨーロッパ』とどう向き合うのか」について見解を述べ、その後出席者によるパネルディスカッションが行われました。

第二部・ウクライナ平和・転換・外交政策研究所のアレクサンドル・スシュコ博士による基調講演

シンポジウムの狙いは、2004年春のEU・NATO東方拡大によって生じた広域ヨーロッパの地殻変動が今後如何なる方向に向かっていくのか、鍵を握るウクライナ、ロシア、トルコの専門家によって議論していただくことにありました。そこでは、第一に、2004年末の大統領選挙でオレンジ革命を達成し、西を向き始めたウクライナが、その後如何なる国内外の状況に直面しているのか、第二に、EU加盟交渉が始まったトルコのEU加盟の可能性とそこに立ちはだかる基本的な問題は何か、そして第三に、2003年から2004年の民主化ドミノによって後退したかに見えたロシアの「近い外国」政策が、EU内統合のつまずき、ブッシュ政権の支持率後退、エネルギー価格の高騰という状況変化の中でどう息を吹き返してきているのかについて議論が深められました。

「広域ヨーロッパ」というあまり聞き慣れない地域に関するシンポジウムでしたが、約130名の方々が参加されました。周知の如く、シンポジウムの開催1週間前、麻生外務大臣が「自由と繁栄の弧」演説を行いました。同演説は、これまで日本外交の基礎を支えてきた日米同盟、国際協調、近隣アジア諸国の重視という3本柱に加えて、第4の柱として、EUやNATOとの協力の下に、広域ヨーロッパを含むユーラシアの不安定な弧を「自由と繁栄の弧」に変えていこうとするものです。漸く日本においても、広域ヨーロッパの重要性が認識され始めたわけで、近い将来また広域ヨーロッパに関するシンポジウムが開催できればと考えています。

第二部・パネルディスカッション

国　際　交　流

国際交流協定大学から短期交換留学生が来学

本学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学（MGIMO）から1月17日に2名の短期交換留学生が来学し、本学からほど近い家庭にホームステイをし、2ヵ月間、国際関係学部の島田助教授の指導を受けながら留学生活を送りました。

今回来学したのは、同大学大学院国際関係学専攻・修士1年生のボローズディナ・ナターリアさんと同大学国際経済学部5年生のグローモヴァ・エカテリーナさんです。ナターリアさんは、修士論文のテーマである「核兵器不拡散に対する日本の立場」に関して、各種資料の収集を行うとともに日本の学生に対するアンケート調査を実施するなど積極的に勉強に励んでいました。また、浜岡原子力発電所を見学するなどして日本の原子力エネルギーの実態把握に努めていました。

一方、エカテリーナさんは、卒業論文のテーマを「日本のクリーンエネルギー市場」と設定し、京都議定書に関する資料をはじめ、各種資料を収集するとともに、日本の環境行政の問題点等について研究を行っていました。

2ヵ月の静岡滞在の間には、ホストファミリーとともに地元ラジオ局のインタビューを受けるなど貴重な体験もしたようです。

2人は、日本での様々な体験を土産に、3月16日にロシアに帰国しました。近い将来、再び日本を、静岡を訪れたいと話していました。

国際交流協定大学から教員が来学

本学と学術交流協定を結んでいる中国の浙江大学から教員が来学されました。

今回来学したのは、同大学人文学院教授の黄笑山（Huang Xiaoshan）先生で、2月15日から約1ヵ月半の間滞在されました。同先生は、初めての来日で、「日本漢語中古アクセント研究」をテーマに、本学教員と共同研究をされ、「切韻」、「韻鏡」、日本漢字音、朝鮮漢字音、漢語方言など、中古アクセント研究に関する資料収集を熱心に行っていました。

米国・オハイオ州立大学と大学間交流協定を締結

本学は、米国のオハイオ州立大学（The Ohio State University；カレン・ホリブルーク学長）と全学的な教員及び学生の相互交流について協議を進めてきたところ、このたび協議が整ったため、大学間交流協定を締結しました。

本学と大学間交流協定を締結する海外の大学等は、オハイオ州立大学が13校目となります。

オハイオ州立大学は、1870年に設立され、学生数は約59,000人と全米有数の規模を誇る総合大学で農業、ビジネス、教育学、人文学、自然科学、工学、社会科学など幅広い専門分野を扱っています。また、あらゆる学問分野において教授陣が充実しており、様々な研究・開発を通して、国際的評価を得ている大学です。特に、大学図書館は、北米最大規模であり、500万冊の蔵書を誇っています。

協定締結に至るまでの経緯としては、平成15年に、本学国際関係学部とオハイオ州立大学日本研究所との間で部局間協定を締結し、同年から開始した「静岡夏期英語研修プログラム」に、これまでの4年間で計50名の学部生が参加しているほか、平成16年には国際関係学研究科比較文化専攻の大学院生を対象とする「静岡語学教育インターンシッププログラム」を開始し、これまでの3年間で3名の大学院生が参加してきたということがありました。

このような交流を続ける中、平成18年8月に、国際関係学部の吉村紀子教授が訪米し、同大学との間でコラボレーション教育活動をさらに発展させ、文系、理系の研究者、教員、学生の交換等を可能とする大学間協定締結について協議を行い、その後、協定締結に向けた手続きを進めてきたものです。

協定の内容としては、共同研究の実施、学生の交流、語学研修、インターンシップ等に関することが謳われています。

平成19年1月16日にオハイオ州立大学側の関係者が協定書に署名し、郵便交換により同年1月25日に本学の西垣学長をはじめ、関係部局長が署名を行い、協定の締結となりました。

実質的に進む延世大との交流～11月に韓国で学生討論会開かれる

昨年11月7日、韓国の延世大の鄭甲泳副総長が本学を訪れて、両大学間の交流協定が締結されましたが、実質的な交流が進んでいます。

締結直前の同月５～6日に本学で開催された「第7回日中健康科学シンポジウム」には、延世大環境工学科騒音振動研究室（博士課程）の大学院生がポスター発表に参加しました。

そして、同月29日にはソウルから東に180キロに位置する江原道原州市にある延世大原州キャンパスを、本学国際関係学部の学生12名（小針ゼミ所属）、国際関係学研究科の大学院生2名、教員1名（小針進助教授）が訪問し、延世大の学生と共に日韓関係に関する討論会と、親善のための交流会を開催しました。

討論会は「未来の日韓関係に関する日韓大学生討論会」というテーマで、まず日韓それぞれの代表学生が交互に基調報告を行いました。日本側学生は「今後の日韓関係の展望」を、韓国側学生は「北東アジア共同体の課題と展望」をそれぞれ発表しました。この2つの発表をもとに自由討論となりましたが、日韓双方から活発な意見が出されました。両国間の懸案事項（靖国問題、教科書問題、竹島問題）とその解決方法、東アジア域内での地域協力のあり方、中国への視点、北朝鮮問題のとらえ方、韓流のとらえ方の違い、文化交流の方向性など、話題は多岐に及びました。

そして、話の内容はもちろんですが、特筆すべきは日韓双方とも自国語だけでなく相手国の言語でも発表ペーパーを自分たちの力だけで準備したことです。また、相手国の言語を学んだ経験がある学生が双方にいたことから、相手国の言葉を解さない学生のために、自前で通訳も行いました。この点は、討論会の準備にあたった金鍾杓教授ら延世大の教授陣も驚いているところでした。さらに、相手の立場に対する理解を深めつつも、決しておもねるわけでもない姿勢を双方は見せて、意義深い討論会であったといえます（討論で日本側基調報告を行った3人の所感は下記「学生の声」を参照）。

なお、本学と韓国の延世大との交流は、3月に西垣学長らが同大を訪問、5月には朝鮮通信使400周年を記念して行われる行列再現行進に参加のために同大学生30名程度が静岡市を訪れて、本学学生と交流を行う予定です。韓国側学生と共に「朝鮮通信使400周年記念行列再現行進」(5月19～20日）に仮装して参加してみたい学生は、小針研究室（kohari@u-shizuoka-ken.ac.jp　TEL 054-264-5345）まで連絡してください。

討論会の後に記念撮影する本学と延世大の学生・教員

＊＊

学生の声　～延世大での学生討論に参加して～

●金山実央（国際関係学部3年生）

双方の考えを知り、理解するうえでとても有意義でした。日本側は文化交流を通じて理解を深めて良い関係を築くことこそ、明るいアジアの未来があると考え、彼らは経済共同体を作って、米国と対抗することにアジアの将来を見出しているように思えました。私たち学生が、意見を率直にぶつけ合い、お互いの考えを受け入れたり、批判しあうことで「交流」が深まり、「理解」に近づくことができれば、アジアの未来に向けての小さな前進になると思います。

●笹山理恵（国際関係学部3年生）

延世大の学生と話ができたことは、とても貴重な体験となりました。今まで韓国について勉強したり、韓国語を学んだりしていましたが、韓国人と話をする機会があまりありませんでした。それだけにたくさんの韓国人学生と話せたことは嬉しく思いました。また、同世代の韓国人がどのようなことに興味を持ち、何を考えているかを知ることもできました。

●高橋真知子（国際関係学部3年生）

日本語と韓国語での発表はとても緊張しました。同じ大学生という立場であっても、日本人と韓国人では、お互いの国に対して抱いている意見に温度差があるという印象を持ちました。ひとつの意見に対して、あらゆる角度から質問や新たな意見が出され、刺激になりました。私には持っている知識が少なく、まだまだ勉強不足だと痛感しました。

＊＊

～さらなる教育研究の向上を目指して～
法人化でこう変わる!?

静岡県立大学は、平成19年4月から公立大学法人化されます。

静岡県立大学は、平成19年4月1日から静岡県公立大学法人が設置・運営する大学になります。

公立大学法人とは

公立大学法人とは、地方独立行政法人の一形態で、県が法律に基づいて設立するものです。

県立大学は、平成19年4月1日から、独立した法人格を持つ「公立大学法人」が設置・運営する大学となります。

なお、設立する法人の名称は「静岡県公立大学法人」となりますが、大学の名称はこれまでどおり「静岡県立大学」です。

法人化の目的・メリット

社会環境が急速に変化していく中で、地域社会や産業界が大学に寄せる期待も、様々な分野に及んできています。また、18歳人口の減少、国立大学の法人化などにより大学間競争も激しくなっています。

公立大学法人化は、こうした環境の中で、県立大学が地域や時代のニーズの変化に迅速かつ柔軟に対応できる自主的・自律的かつ効率的な大学運営を確保し、教育研究活動の活性化により、魅力ある大学づくりを進めることを目的とするものです。

法人化のメリットとしては、

・独立した法人として自主的、自律的かつ効率的な運営が可能になる。
・目標管理と第三者評価を通じた業務改善により、計画性の高い大学運営が可能になる。
・業務執行の各段階での公表を組み込むことにより、公共性、透明性の高い大学運営が可能になる。
・人事・財務会計制度が弾力化され、柔軟な大学運営が可能になる。

などが挙げられます。

これらのメリットを十分に生かすことにより、教育・研究の向上、地域貢献の強化を進め、より魅力ある大学を目指します。

法人の組織

法人の代表者として、新たに理事長が置かれ、一方、学長は、教学の責任者となるとともに、副理事長を兼ねます。

また、教育研究、総務、経営（学外者）を担当する理事をそれぞれ置きます。

大学の教育研究に関する重要事項を審議する機関として教育研究審議会を設置し、法人の経営に関する重要事項を審議する機関として経営審議会を設置します。また、両審議会の調整や法人の基幹的な重要事項を審議するために役員会を設置します。

法人の人事制度

教職員は、県から派遣される事務職員を除き、これまでのような公務員ではなくなります。

法令上の制限が緩和され、地域貢献、産学連携などが円滑に進められるようになります。

法人の財務会計制度

法人の会計制度は、企業会計原則によることとされ、毎年、財務諸表を作成し、公表することが義務付けられます。

法人の目標・評価

これまでは、大学の中期的な目標や計画は任意に定めていましたが、法人化後は、法律の規定に基づき6年間の中期目標・中期計画と毎年度の年度計画を定めて大学を運営します。

また、県に、外部有識者による評価委員会が設置され、毎年度及び中期計画期間終了後に評価が行われます。

他大学の状況

国立大学は、平成16年4月にすべて法人化されました。

公立大学では、全国の公立大学76校（4年制、大学院大学を含む）のうち、平成16年4月に１校、17年4月に７校、18年4月に15校、合わせて23校が法人化しています。平成19年4月には本学を含め13校が法人化を予定しているので、19年度には全体の約半数が法人化することになります。

法人化後の組織

本学教員の著書紹介

『抗ストレス食品の開発と展望』

シーエムシー出版　全338頁
2006年10月31日刊行、定価65,000円
食品栄養科学部　教授　横越　英彦（監修）

日本は、世界の中で最長寿国といわれるが、多くの国民が「人間らしく健康・長寿」を全うしているとは思われない。すなわち、何らかの症状を抱えながら半健康状態で寿命を延ばしている。なぜならば、健康の維持・増進の障害となるストレス（ストレッサー）があまりにも世の中には多く、全ての年齢層の上にのしかかっているからである。この高ストレス・高齢化社会の中でストレス状態が引き金になって心身の障害を生じてしまったときには、医学的・薬学的な療法に頼るしかない。しかし、如何にしたらストレス状態を予防できるか、あるいは、ストレス状態になったときに、どのようにしたら軽度に抑えることができるかという点には、食品の役割があるように思われる。

現在、国民の健康志向は高く、またそれに同調するように、各食品会社や製薬会社は、抗ストレス作用という機能性を付与した商品を多く販売している。果たして、それらの効能のエビデンスは十分なのか、あるいは、ストレス反応の機構から考えて、今後、どのような新規の抗ストレス食品の開発が望まれているのかの展望を明確にすることは意義あることと思われる。

本書は、今後、ますます需要が増えると予測される抗ストレス食品の開発に対して、そもそもストレスとはどういうことで、どのような生体反応の変化が惹起されるのか、またそれをどのように評価するかについての基礎編と、一方、これまでにストレスとの関連で注目されている食材について、そのエビデンスはどうなのかを取り上げた素材編の二部構成になっている。

『牧畜二重経済の人類学―ケニア・サンブルの民族誌的研究』

世界思想社　全322頁
2006年12月20日刊行　定価4,935円
国際関係学部　助手　湖中　真哉

東アフリカのケニアにサンブルと呼ばれる牧畜民が暮らしています。本書は、彼らの社会で数年にわたって暮らしながら行ったフィールドワークによる調査研究の成果をまとめたものです。アフリカなんて私の生活には何も関係ない、とお考えの学生もいらっしゃるかも知れません。しかし、地球上の諸社会が緊密に一体化するグローバリゼーションの時代では、私たちに関係ない社会などありません。アフリカといかに向き合うかは、今日、国際社会の最重要課題として頻繁に議論されています。

グローバリゼーションの時代において試されているのは、たとえどんなに離れた場所の生活であれ、わがごととして考えられる複眼的な想像力です。本書では、グローバリゼーションの渦中でアフリカ牧畜民が織り成してきた創意の数々が分析されています。様々な既成概念や常識を覆し、アフリカに即したものにつくりかえるべく、悪戦苦闘してきた成果がつづられています。それがグローバリゼーションを考える何らかのヒントとなれば幸いです。

なお、本書は、京都大学大学院に提出された博士学位（地域研究）申請論文を、平成18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）学術図書の助成を受けて出版したものです。

研究助成採択

平成１９年度　日本学術振興会 外国人特別研究員の受入れに係る科学研究費補助金

受入研究者：薬学部 生薬・天然物化学分野 講師　阿部　郁朗
招聘研究者：中国・北京大学　史　社坡　Shepo Shi, Ph.D.
招 聘 期 間：2007年４月1日～2009年3月31日
研 究 課 題：生合成酵素を用いた非天然型新規化合物ライブラリーの構築

平成１８年度厚生労働科学研究費補助金採択実績

【本学教員が主任研究者である研究事業】

研究者区分	部局名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名
主任研究者	薬学部	教授	野口博司	研究事業名：ヒューマンサイエンス振興財団(創薬等ヒューマンサイエンス総合研究事業) 研究課題名：変異を克服した画期的抗ウイルス薬の開発
分担研究者	薬学部	教授	佐藤雅之	
分担研究者	薬学部	教授	菅　敏幸	
分担研究者	薬学部	教授	鈴木　隆	
分担研究者	薬学部	助教授	池田　潔	
分担研究者	薬学部	助手	古田　巧	
主任研究者	国際関係学部	教授	石川　准	研究事業名：感覚器障害研究事業 研究課題名：視覚障害者、盲ろう者向け音声・点字コンピュータ・オペレーティングシステムの開発
分担研究者	経営情報学部	助教授	湯瀬裕昭	
主任研究者	経営情報学部	教授	小山秀夫	研究事業名：長寿科学総合研究事業 研究課題名：介護老人保健施設及び介護療養型医療施設における経営実態及びマネジメント実施状況に関する研究

【他機関の研究者が主任研究者である研究事業】

研究者区分	部局名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名
分担研究者	薬学部	教授	山田静雄	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	山田静雄	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：いわゆる健康食品の健康影響と健康被害に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	野口博司	研究事業名：ヒトゲノム・再生医療等研究事業 研究課題名：生合成解析と遺伝子組換え技術を基盤とする薬用植物の活用に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	山田　浩	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究
分担研究者	薬学部	教授	奥　直人	研究事業名：萌芽的先端医療技術推進研究事業 研究課題名：シュガーチップを用いた検査・診断技術
分担研究者	薬学部	講師	浅井知浩	研究事業名：萌芽的先端医療技術推進研究事業 研究課題名：がん新生血管を標的としたAll in oneデバイスによる革新的siRNAデリバリーシステムとがん治療法の開発
分担研究者	食品栄養科学部	助教授	合田敏尚	研究事業名：食品の安心・安全確保推進研究事業 研究課題名：特定保健用食品の新たな審査基準に関する研究
分担研究者	経営情報学部	教授	西田在賢	研究事業名：政策科学総合研究事業 研究課題名：特定機能病院における脳外科手術の原価費用の精密定量と、症例集中がもたらす費用節減効果の検討
分担研究者	看護学部	助教授	奥原秀盛	研究事業名：第3次対がん総合戦略研究事業 研究課題名：がん生存(Cancer survivor）のQOL向上に有効な医療資源の構築研究
分担研究者	環境科学研究所	教授	大橋典男	研究事業名：新興・再興感染症研究事業 研究課題名：リケッチア感染症の国内実態調査及び早期診断体制の確立による早期警鐘システムの構築

平成１８年度厚生労働省がん研究助成金採択実績

【他機関の研究者が主任研究者である研究事業】

研究者区分	部局名	職名	氏名	研究事業名・研究課題名
分担研究者	薬学部	教授	奥　直人	研究課題名：がん化学療法におけるドラッグデリバリーシステム（DDS）の開発に関する研究
分担研究者	食品栄養科学部	教授	大島寛史	研究課題名：新規化学発がん要因の検索とその生物活性

教員の人事

就任
（2月1日付け）
岩本　義久　評議員（看護学部）

採用
（1月1日付け）
齊藤　真也　薬学部助教授

昇任
（1月1日付け）
根本　清光　薬学部助教授
稲垣　真輔　薬学部講師

訃報　朝香幹照事務局学務参事兼学生部次長　逝去

本学の事務局学務参事兼学生部次長の朝香幹照氏が、平成19年1月11日、御逝去されました。享年57歳。

同氏は、平成17年4月1日付けで本学に赴任し、学務スタッフの総括業務等に尽力されました。

ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

受　賞

■平成19年度日本薬剤学会功績賞を受賞

園部 尚教授

薬学部薬学科創剤科学分野の園部尚教授は、平成19年度日本薬剤学会功績賞を受賞しました。同賞は、同学会の運営・発展への貢献、薬剤学教育への貢献、薬剤学・製剤学の進歩・発展・振興への貢献及び医療薬剤学の進歩・発展・振興への貢献に関する功績を顕揚するために設定されたものです。同教授は、薬剤学分野で優れた研究業績を残し、社会的活動への貢献度が顕著であり、同学会の社団法人化に多大な貢献があったことにより、同賞を受賞しました。

■世界緑茶協会　O-CHAパイオニア賞学術研究大賞を受賞

木苗直秀教授

食品栄養科学部の木苗直秀教授は、世界緑茶協会の平成18年度O-CHAパイオニア賞学術研究大賞を受賞しました。同賞は、茶に関する優れた学術研究、緑茶の振興及び発展に寄与した産業技術、緑茶のある豊かな生活文化の提案や消費拡大等の優れた成果を顕彰する賞であり、木苗教授は「緑茶の抗酸化・抗変異原性に関する研究」で業績を挙げ、評価されました。

■日本流通学会第10回学会賞を受賞

経営情報学部の森田克徳助教授は、著書『争覇の流通イノベーション　ダイエー・イトーヨーカ堂・セブンイレブン・ジャパンの比較経営行動分析』（慶應義塾大学出版会，2004年10月刊行）において、日本流通学会第10回学会賞を受賞しました。同書は、「企業間競争の覇権を競うという『争覇』という固有の視点を明示し、現代日本を代表する流通企業の経営行動を丹念な企業調査を行いつつ、比較し」、「この間出版された幾多の著作の中でも秀逸であり、当該分野の学術・研究活動に多大な貢献をした」と評価され、同賞を受賞したものです。

森田克徳助教授

なお、同書の紹介は、はばたき96号（2005年12月発行）の「本学教員の著書紹介」の中に掲載されています。
(当該記事は、前号に掲載する予定でしたが、手違いにより本号の掲載となりました。)

■第11回日本フードファクター学会でYoung Investigator Awardを受賞

平成18年11月20～21日に、愛知県犬山市で開催された第11回日本フードファクター学会において、本学看護学部の竹村ひとみ助手と、本学大学院生活健康科学研究科修士課程2年の森大気さん（食品プロセス学研究室）が、Young Investigator Awardを受賞しました。この賞は、本学会における40才未満の若手研究者による発表の中から、特に優秀な発表に贈られるものです。

竹村助手が発表した演題は、「メトキシフラボノイド・クリソエリオールのCYP1B1阻害作用とエストロゲン代謝への影響」、森さんの演題は「質量分析法による茶カテキン類－蛋白質相互作用の化学的解析」です。両者とも、食品成分の新たな生理活性発現機構を解明したことが高い評価を受けました。

看護学部　竹村ひとみ助手（右端）

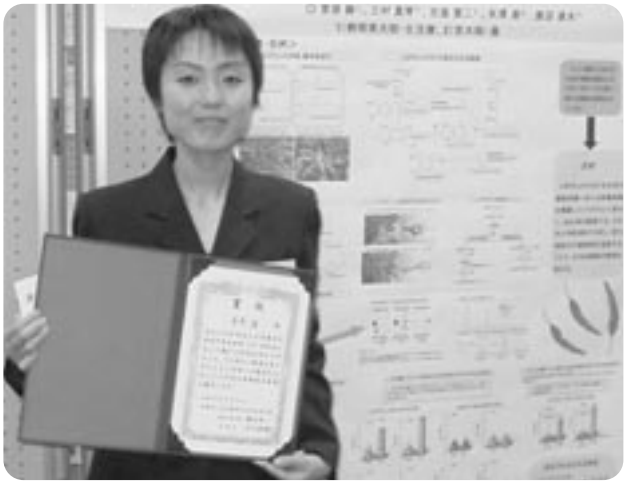
生活健康科学研究科修士課程2年　森 大気さん（右側）

■平成18年度科学交流フォーラム（第8回静岡大学ライフサイエンスシンポジウム）でポスター賞を受賞

平成19年1月10～11日に、静岡大学で開催された平成18年度科学交流フォーラム（第8回静岡大学ライフサイエンスシンポジウム）「医学を支える生命科学の最前線」において、本学大学院生活健康科学研究科修士課程2年の森大気さん（食品プロセス学研究室）がポスター賞を受賞しました。この賞は、優れたポスター発表を行った大学院生に授与されるもので、受賞対象となった演題は「食品因子と相互作用する蛋白質の探索と機能解析」でした。

■日本農芸化学会中部支部第147回例会で維持会員賞を受賞

平成18年10月21日（土）に名古屋大学・野依記念学術交流館で日本農芸化学会中部支部第147回例会が開催されました。 その一般講演（ポスター発表）で、本学大学院生活健康科学研究科修士課程2年の菅原 舞さん（食品化学研究室）が、維持会員賞を受賞しました。この賞は研究内容とプレゼンテーションが共に優れている発表をたたえるものです。研究テーマは「LC/MS/MSを用いたトウガラシ辛味関連化合物の生合成経路の解明」で、内容はトウガラシの辛味成分カプサイシンと新規無辛味成分カプシエイトの生合成について、前駆物質の安定同位体を植物体に投与して、その動態を液体クロマトグラフィー/質量分析装置（LC/MS/MS）で解析したものです。



生活健康科学研究科修士課程2年　菅原 舞さん

■平成18年度（財）ソロプチミスト日本財団　社会ボランティア賞（青少年の部）を受賞

本学国際関係学部の津富ゼミ（行動コース）の活動に対して、財団法人ソロプチミスト日本財団から社会ボランティア賞（青少年の部）が授与されました。同財団は、社会福祉、女性の地位向上、青少年問題に関する国内及び海外での顕著な活動に対する顕彰及び援助を主要事業としています。津富ゼミは、平成15年から、国際的視野に立ちながら、地に足の着いた社会貢献をするという目標に向け、学生という立場からできる精一杯のことをするために議論を重ねてテーマを選んで活動してきました。これまで行ってきた、県内の外国人と日本人の小学生のための多文化共生キャンプ、児童買春をテーマに県内の高校生を対象としたカンボジアスタディーツアー、県内で暮らす外国人向けのガイドブックの作成・出版（本号P18参照）等の活動が評価され、今回の受賞となりました。

津富ゼミを代表して表彰を受ける
国際関係学部4年・宮﨑恵梨さん（写真・前列右から2人目）

■静岡県立大学卒業生が西湖友誼賞を受賞

本学国際関係学部を平成9年3月に卒業し、現在、浙江桜花外語専修学校（所在地:中国浙江省杭州市）に勤務されている津守 愛さんが、浙江省人民政府から西湖友誼賞を授与されました。1997年に設立された同賞は、浙江省の経済建設、社会発展に大きな貢献をした浙江省在住の外国人に与えられるもので、毎年、30～40人が受賞しています。今回の受賞は、現地での日本語教育を通じた人材育成が高く評価されたもので、平成18年11月8日に授賞式が行われました。

図書館だより

シリーズ　『私の1冊の本』

図書館では、利用者への読書推進の一環として、先生方が読んで、感動し心に残った本を紹介しています。

尹　大榮　経営情報学部 助教授

紹介図書名：『海の都の物語（上・下)』
著　者　名：塩野 七生
出 版 社 名：新潮社
ＩＳＢＮ：（上）4106465043
（下）4106465051
図書館所蔵：１階閲覧室　237.04/Sh75/4-5

「水上都市」として知られるイタリアのヴェニス（ヴェネチア）は、じつに不思議な町である。アドリア海のラグーナ（干潟）に浮ぶこの町は、150を越える小さな島々からなっていて、島と島の間を移動するには橋かゴンドラなどの船を利用するしかない。車が走れない町でもある。

ヴェニスでは、迷路のような狭い路地に入ると、真夏の昼間でもうっすらとした闇に包まれる。しかし、路地から一歩広場にでも出ると、突然コバルトブルー色の青空に輝く太陽の明るさで目がくらくらしてきて、その明暗の落差の激しさにはいつも驚かされる。観光とは「光を観る」と書くが、光を観ることは同時に「闇を観る」ことでもあるのだと気づかされる。

私がこの町の姿をはじめて目にしたのは、中学生時代にトーマス・マン原作『ヴェニスに死す』(1971)を映画で観たときである。ヴェニスのホテルで偶然見かけた美少年に魅入られたある芸術家の苦悩と恍惚を描写した作品だが、大人の退廃的で甘美な世界の一端を覗き込んでしまったことに恐怖心を覚えつつも、ヴェニスの町の不思議な魅力にすっかり心を奪われた。いつかは自分の足であの島を歩いてみたいと切望するようになったのである（その夢は、25年後にやっと実現するのだが。)。

私の専門分野は経営学であるが、じつはヴェニスは経営学の歴史と深い関係がある。複式簿記が考案されたのも、株式会社的なビジネスの仕組みを発展させたのも、東方貿易で栄えた海洋国家のヴェニスにおいてである。また、強大国に囲まれていながら、天与の資源に恵まれないこの小さい都市国家が、しかも国体（統治システム）を変えないで、いかに千年間も繁栄を謳歌できたのか。その歴史について調べてみればみるほど、経営学の戦略論や組織論のエッセンスがいくらでも見つかるのである。例えば、ヴェニス共和国の統治システムが一個人や一機関に頼らず、特定の人や機関に権力が集中することを極力排除した仕組みを採択してきたことは有名であるが、最近重要な経営テーマとなっている「コーポレート・ガバナンス」の議論を考える際にヴェニス共和国の統治システムはじつに示唆に富むケースなのである。

塩野七生氏は、もちろん経営学者ではない。しかし彼女の労作『海の都の物語』を読むと、「虚の世界」に住むはずの作家でありながら、「実の世界」を相手とする経営学者よりもよほど組織及びそこで働く人間についての記述が卓越していて、経営学者として深く反省させられる一方である。本書は、ヴェニスついて深く知りたい人はもちろんだが、組織のマネジメントやリーダーシップなどに興味のある人にはぜひお勧めしたい本である。

白尾久美子　看護学部 助教授

紹介図書名：『壊れた脳生存する知』
著　者　名：山田規畝子
出 版 社 名：講談社
ＩＳＢＮ：4-06-212268-5
図書館所蔵：１階閲覧室　916/Y 19

本書は、脳出血に脳梗塞を併発した医師である筆者が、高次脳機能障害を生じ、様々な後遺症に苦しみながらも、自らの病気について書きとめたいわゆる闘病記である。しかし一般的に目にする闘病記とは一種異なった闘病記であるといえる。

筆者が高次脳機能障害という脳に障害をもっていることである。脳出血や脳梗塞により脳に損傷を受けた人々の障害とは、手や足の麻痺というのが一般的に知られていると思われる。しかし高次脳機能障害は、言語・思考・記憶・行為・学習・注意などに障害が生じ、脳の損傷の部位によっては、手足に麻痺が生じなくても障害が発生する場合があり、他者に非常に理解されにくい障害であるという特徴をもっている。私自身も学生の実習等で、高次脳機能障害の患者と接した経験をもつが、障害そのものを把握することの困難さを実感している。

本書で筆者は、正常な機能が障害されつつも、体験している様々な障害をカラリと書き記している。例えば、目が見たものを脳が正しく理解できないために、和式のトイレとタイル張りの床が区別できずに、便器の中に足を突っ込んでしまったこと。ベッドシーツと床の区別がつかなかったために、手を着く場所として床を選択し転んでしまったこと。階段の前に立つと、階段がアコーディオンの蛇腹のように、横走する直線の棒の繰り返しにしか見えないため、下りる階段なのか、上る階段なのかを悩むこと。

このように、筆者が体験した多くの日常の障害は、具体的にそして客観的に描写されている。しかしながら本書は、脳の障害について単に書き連ねた闘病記ではない。脳の損傷により、働きが障害されただけではなく、心の障害についても率直に語られている。「何やってんだろう、私。そう。高次脳機能障害の本当のつらさがここにある。おかしな自分がわかるからつらい。知能の低下はひどくないので、自分の失敗がわかる。（中略）いっこうにしゃんとしてくれない頭にイライラする。度重なるミスに、われながらあきれるわ、へこむわ、まったく自分が自分でいやになる。」（第3章より抜粋）「おかしな自分がわかるからつらい。」というこの1文は、今までまったく気づくことができなかった、高次脳機能障害をもった人々の心の叫びを聞いたように感じた。

本書は、高次脳機能障害を知っている専門化のための本ではない。高次脳機能障害をまったく知らない人々でも、この本を通して、障害をもちながら生活する人々の真実の声を聞く機会になることを期待している。

今からしよう!!生活習慣病予防

～栄養教育論実習　ライフステージ別（青年期）研究発表報告～

食品栄養科学部　栄養学科　3年　太田恵　清和千秋　畑和幸　柳田桃子

私たち食品栄養科学部栄養学科の3年生は、平成18年度後期栄養教育論実習（吹野洋子先生担当）の一環でライフステージ別の栄養教育について研究し、平成19年1月26日に研究発表会を行いました。私たちのグループは大学生を対象とし、生活習慣病にならないために、食生活をより良くし健康的な生活を送ってもらうことを目的に『今からしよう　生活習慣病予防』のテーマのもと研究を行いました。

一人暮らしの大学生の食生活、食意識を把握するために、国際関係学部の98名の学生に御協力いただき、質問紙調査を実施しました。調査の結果から次のようなことが明らかになりました。

自分の食生活に問題を感じているのにもかかわらず具体的な解決策を持っていない者が多い。

外食・中食を定期的に利用する者が多い。

生活習慣病への関心は高く、健康に対する意識は高い。

これらのことを踏まえ、生活の中で役立つ内容の栄養教育のプランを考えました。

生活習慣病とは「食習慣、運動習慣、休養、喫煙、飲酒等の生活習慣が、その発症・進展に関与する疾患群」と定義されており、発症の多くは若い頃からの生活習慣の乱れに起因しています。

将来、生活習慣病にならないためにはどのような食生活を送ったらよいのか、具体的にコンビニエンスストアなどの中食を上手に活用する方法として、『主食』『主菜』『副菜』の揃った食事をすることを提案することにしました。ここでは、そのうちの一部について御紹介します。

◆『健康』は毎日の食事で守りましょう！

1日3食同じくらいの量になるように食べましょう。

「主食」＋「主菜（肉、魚、卵、大豆製品など）」＋「副菜（野菜など）」を組み合わせて、食品をバランスよくとりましょう。

できるだけ時間帯を決めて規則正しく食べましょう。

◆コンビニをうまく活用する　～組み合わせのポイント～

「忙しくて手作りできない！」「1人暮らしって、ご飯を作るのが面倒！」という方は、コンビニの食品でも、ほんのちょっと組み合わせを工夫するだけで、栄養バランスはグンとよくなります。

ほんの一例を紹介します。

例　「おにぎりが食べたい場合」

おにぎり＋野菜の惣菜（例：肉じゃが）＋味噌汁

おにぎりは1個約160Kcalです。一回に2個までとしましょう。

例　「焼肉弁当が食べたい場合」

焼肉弁当＋野菜のお浸し、またはサラダ

焼肉弁当でも少し野菜の入っているものもありますが、この程度では野菜の量が足りないので、あと一品、野菜を使った料理をプラスしましょう。

～野菜ジュースの落とし穴～

野菜と野菜ジュースの大きな違いは食物繊維の量です。野菜ジュースと野菜では、食物繊維の量が圧倒的に違うので、野菜ジュースだけでは野菜不足の解消にはなりません。

◆ 健康的な食生活を送るポイント♪

夜食や間食を減らし朝食をもりもり食べ、イキイキと１日をはじめる。

ご飯などの穀類を毎食食べる。

野菜・果物からビタミン・ミネラルを補給、野菜ジュースなどに頼り過ぎない。

牛乳や乳製品（ヨーグルト、チーズなど）でカルシウムを摂る。

塩分・脂肪分を適量摂れる食事にしましょう。

20年後30年後に生活習慣病を発症しないために、若い時期から健康的な食生活の知識を身につけ、それを習慣とすることが重要です。これを機会にご自身の食生活を見直してみましょう！

アンケートの作成、配布、集計、まとめは煩雑な作業で大変でしたが、大学生が食生活や生活習慣病に対し、どのように考えているかを知ることができ、今後の参考になりました。今回、実態に基づいた栄養教育の発表ができたと実感しています。

管理栄養士として働く日も近くなってきますので、このような実習を大切にしながら勉強に励んでいきたいと思います。

最後に、調査に御協力下さった国際関係学部の先生、学生の皆様に御礼申し上げます。

食品栄養科学部栄養学科３年生が 地域住民を対象に「るんるん健康教室」を開催

食品栄養科学部　助教授　白木　まさ子

食品栄養科学部栄養学科の3年生が、平成18年11月29日（水）午後、食品栄養科学部棟1Fで地域の方々を対象に「るんるん健康教室－高齢者へのやさしい食事ガイド」を開催しました。総合演習の一部として、高齢者の方々の食事づくりのお手伝いと実習を通して参加者とのふれあいを楽しむことを目的に企画したものです。当初、地元の方に教室開催をどのようにしてお知らせしたらよいか、どのくらいの人が参加してくれるのか気がかりでしたが、地元の有志や老人クラブ、健康支援センターの御協力のおかげで、料理教室、パッククッキングの試食、栄養補助食品の展示コーナーに約50名の方々が参加してくださいました。学生の熱心な態度、参加者への気配り、盛りだくさんな配付資料等いずれも好評で、来年も開催してほしい、またぜひ参加したいとの声を多数いただきました。今回の経験を生かし、来年も地域の方々の健康づくりに役立つ健康教室を計画したいと思っております。

介護食品、栄養補助食品の展示

〈健康教室感想〉

食品栄養科学部栄養学科３年　藤本　沙紀

学生主催の「るんるん健康教室」では、初めて一般の方を招いて教室を開きました。高齢になっても健康に過ごすことができるように、本人はもちろんその家族も対象として、高齢者の体の特徴や陥りやすい栄養状態と料理・食事をする上でのポイントを知ってもらうことを目的としました。

栄養バランスを考えた手作り料理実習、　電子レンジ・炊飯器・電気ポットを利用した簡単料理の実演、　栄養補給のための介護食品や栄養補助食品の紹介、と3つのグループに分かれて自分達で内容を考えました。

私は　のグループで、火を使わずに洗い物も少なく料理ができる、簡単な調理法を紹介しました。計画する上では、参加者が確定していなくて準備しづらい面もありました。不安も残る中、当日を迎えましたが、参加された方々は想像以上に熱心に私達の実演を見てくれました。参加者の構成は主婦の方が多く、逆にアドバイスをいただくこともありました。普段あまり話すことのない年代の方とふれあうことができて、とても勉強になりました。どのようなテーマ、話し方をすれば興味を持ってもらえるかを考えて準備を進めることが重要なのだと知りました。

電気ポットを利用した簡単料理の実演

この教室では、さまざまな年代の人を対象に栄養指導を行う保健所栄養士の仕事と近いものを体験することができました。「楽しかった」「勉強になった」という声が聞けたのがうれしかったです。準備不足での失敗もあり反省する点も多いですが、とてもやりがいのある実習でした。

〈料理教室参加者の感想・意見〉

・健康教室に参加してとても有意義でした。資料、案内書をいっぱい用意してくださり大変でしたね。朝食、昼食、夕食の作り方の説明など、学生の方の説明は、丁寧でわかりやすいものでした。作り方が簡単で栄養バランスがとれていて、家に帰ったら作りたいです。電子レンジ、炊飯器、電気ポットを利用した簡単料理など楽しかったです。

・若い学生さん達の説明はわかりやすく、楽しい料理講習会でした。献立も工夫されてとても役に立ちました。これから近所の人たちにも作ってあげたいと思います。これからもこのような機会をぜひもってください。ありがとうございました。

・本日参加して得ることも多く、本当に良かったと思います。栄養補助食品等これからも使ってみようと思います。感謝！です。

実習後の会食

平成18年度スルガ銀行　寄附講座『これからの地域ケア経営』セミナーを終えて

地域経営研究センター非常勤職員　大吉　真里

大学院経営情報学研究科附属の地域経営研究センターは、2月3日　、スルガ銀行　寄附講座『これからの地域ケア経営』セミナーを開催しました。昨年10月に学内で行われた「医療・福祉の経営セミナー」と秋期社会人学習講座の参加者やそれをやむなく欠席された方から、度々反響やアンコールが寄せられ、本セミナーが実現しました。今回は、スルガ銀行から積極的な御協力をいただき、会場として医療福祉事業の強化を目指す県の東部地区に位置する沼津ナティビル可能館を提供していただきました。数年前の法改正を受けて、経営不振や看護師不足により休院や経営縮小に追い込まれる施設のニュースを耳にする中、開催前から期待を受け、県内外の関係者が多数参加されました。医療福祉機関の経営管理者・関係者に対象を絞り、募集期間は1ヶ月半足らずでしたが、予想を上回る82名もの参加があり、前回から継続して受講された方が約7割を占めました。また、社会人学習講座等で活用している遠隔講義システムのテスト運用として、学内にも会場を設置し、学部生・大学院生にもリアルタイムで配信することができました。

当日は、西垣学長から「大学の各学部組織を活かして県の医療福祉事業と積極的に協力体制を築いていきたい。」との挨拶があり、その体制作りに向けて本学に赴任した西田在賢教授と小山秀夫教授の紹介が行われました。続いて、地域経営研究センター長を務める西田教授が、「地域経営研究課題としての『医療・福祉』」をテーマに、医療福祉事業における経営近代化のためには、この分野に精通し、経営者の視点から事業を監督できる管理者の養成が必要であると訴えかけました。私は、地域経営研究センターの窓口を担当する中で、医療福祉事業者が経営相談を持ち込む先を見つけづらい現状が、セミナーのリピーターの数に反映されているのだろうと感じました。その後の「地域ケア連携からみた病診介護経営」をテーマにした小山教授の講義では、厚生労働省で長年研究され、全国各地の施設を指導された経験から、改正後の法に則った具体的な経営アドバイスがあり、必死にメモをとる受講生の姿が見られました。

本セミナー終了後には、大学院出願希望者も現れ、本学が社会に必要とされる人材を供給し続けるために、地域経営研究センターは、先進的な姿勢で研究を続け、その成果を地域に還元するための機関として、様々な形で提案をしていかなければならないと感じました。

医療福祉事業者の経営相談窓口について
受講生へ問いかける西田在賢教授

長年の研究・指導経験からアドバイスをする小山秀夫教授

クラブ・サークル紹介

箏　曲　部

食品栄養科学部　食品学科3年　杉山　このみ

■　「箏曲部」を御存知ですか？

私たち「箏曲部」は、和楽器の「琴」を演奏する部活です。クラブ棟B地下1階に部室があり、隣の和室で活動しています。毎週土曜日には、OGでもある素敵な講師の先生がいらしてくださり、ひとりひとりにしっかりとした指導をしてくださいます。春・秋と年2回の演奏会があり、秋は大講堂で着物を着て演奏しています。小規模な部活ですが、自分のペースで基礎から楽しく琴を学ぶことができる、雰囲気のとても良い部活だと思っています。

■　春、秋の演奏会、そして、創立20周年記念式典レセプションでの演奏も…
～平成18年度の活動を振り返って～

秋の演奏会「つむぎ唄」での合奏

平成18年度は、それまで平日に行っていた春の演奏会を土曜日に開催し、小講堂において、全員浴衣姿で演奏しました。また、昨年10月の剣祭では、2日目に大講堂にて秋の演奏会を開催し、本学の環境科学研究所に在籍されている塩澤先生にフルートを演奏していただくとともに、ピアノとも合奏を試み、古典曲やポップスを披露させていただきました。続いて、11月には、本学の創立20周年記念式典のレセプションにおいて、塩澤先生のフルートとの合奏を披露させていただきました。

創立20周年レセプションにて

また、平成18年度の初め頃、拙いですがウェブサイトを開設し、当部の活動や発表会の様子をお知らせするなど、広報活動にも力を入れ、皆様に箏曲部を知っていただこうと努めています。

このように、平成18年度は箏曲部員の力だけでなく、本当に多くの方の御協力によって、充実した一年を送ることができたと思います。皆様、本当にありがとうございました。

■　メッセージ　from　箏曲部

普段、琴に関わることはあまりないと思います。実際、部員のほとんどは、大学に入って初めて琴に触れています。私は、平成18年度の部長を務めさせていただきましたが、この部に入るまでは音楽に関わったことは一切なく、音感やリズム感も皆無でした。演奏の腕前の上達も本当に遅かったのですが、それでもここまでやって来られたのは、琴自体の持つ楽しさと部内の雰囲気の良さのおかげだったと思います。少しでも琴に興味をお持ちの方は、ぜひ一度体験してみてください。

今年も春・秋の演奏会に向け、部員一同邁進して参りますので、どうぞよろしくお願い致します。

秋の演奏会を終えて

※静岡県立大学箏曲部HP：http://kotode.donburako.com/

軽　音　楽　部

経営情報学部　経営情報学科2年　馬島　佑介

こんにちは。軽音楽部です。

私たちは、音楽が好きな人間が集まり、バンドを組んで日々ライブに向けて練習を重ねています。ジャンルはポップスやロック、パンク、メタルなど様々です。部室の設備も整っており、今まで楽器に触れたことのない初心者から楽器・機材に詳しい経験者まで、誰もが音楽を楽しめる環境です。

主な活動としては、2カ月に1回ほどのペースで行うライブの他に、毎年夏にはスタジオが併設された宿泊施設を利用し、2泊3日程度の合宿を行っています。また、剣祭ではモニュメント下を野外ステージに見立て、ライブを行っています。

現在、部員は50名ほど在籍しており、それぞれが切磋琢磨し、精力的に活動しています。しかも、普段から部活外でも部員間の交流があり、夜景を見にドライブをしたり、先日は富士急ハイランドへも行きました。また、毎ライブ後に行う打ち上げでは先輩後輩が肩を並べ、音楽談義に花を咲かせます。

昨年は、夏に県立大学の小講堂において、静岡大学と常葉大学の方々との合同ライブを行いました。ステージは、長丁場になり大変でしたが、部員同士の絆が深まり、他大学とのつながりをより強いものにすることができました。今年もより一層、親交を深めて行きたいと思います。

興味のある方は、ぜひ一度、軽音楽部に足を運んでみてください。

※静岡県立大学軽音楽部HP：http://page.freett.com/k_on/

剣祭に降臨した悪魔たち

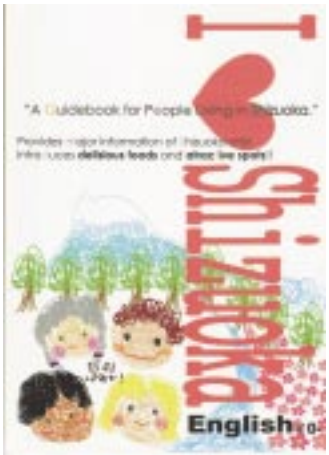
静岡ガイドブック「I❤Shizuoka」を刊行

国際関係学部・津富ゼミ第3期生（現4年生）は、この度、「I❤Shizuoka」を発行しました。「I❤Shizuoka」は、静岡に住む外国人に向けた、静岡の情報を楽しく伝えるガイドブックです。静岡のお店の紹介、お出かけ情報、イベント情報、日本料理の作り方等が載っていて、フリーペーパーとして無料で配っています。

以前、外国人の方にアンケートをした際に「自分たちの言語で得られる情報が少ない。」という言葉を聞いたのがきっかけで制作を始めました。このガイドブックは、英語・中国語・ポルトガル語で書いてあります。本の制作は全くの素人だった私たちが、翻訳ボランティアの方をはじめとする多くの方々の協力を得て完成させました。国際交流協会や観光協会など、静岡市内にも置かせてもらっています。

留学生の皆さん、友達や知り合いに外国人の方がいる皆さん、欲しい人はぜひ津富研究室まで来てください

連絡先：国際関係学部　津富宏研究室（一般教育棟2608）
メールアドレス：tsutomi3rd@yahoo.co.jp



全学防災訓練を実施

平成18年11月28日に、全学の防災訓練を実施しました。授業中に震度6の東海地震が発生し、学内から火災も発生したと想定し避難訓練を行い、教職員・学生約1,700人が積極的に参加しました。避難後には静岡市の石田消防署員の方から訓示をいただき、消火器操作訓練や起震車による地震体験、安否確認システム*を利用した安否の確認訓練等を行いました。

また、学内外で積極的に活動し活躍している学生の防災ボランティアサークル「防'z」の協力を得て、AED（自動体外式除細動器）の操作説明も実施しました。これを期に防災意識を高めていただければと思います。

担架を使ったケガ人搬送訓練

＊安否確認システム

本学教員が開発した、災害時に職員や学生の安否を確認するシステムです。保護者の方でもパソコンや携帯電話からhttp://anpi.u-shizuoka-ken.ac.jp/へアクセスしていただき、確認したい方の名前を入力すれば安否の確認ができます。なお、このシステムは他の教育機関へも提供しております。

谷田風土記―93

日本一の霊峰富士を望む大学

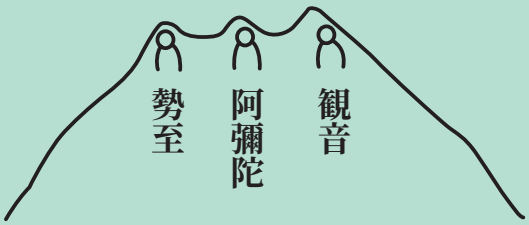
富士山は、『この世』と『異界』の境界にある。万葉集はじめ古典でそれが意識されてきたことは言うまでもない。『地のもっとも高き処』であり『天にもっとも近き処』でもあるからだ。かぐや姫や羽衣の天女も帰った処だ。

さらに、ここは『極楽浄土』でもある。富士山頂をよく見ていただきたい。三つに分かれている。昔、子供が富士を描くときは、必ず山頂を三つに分けたのは周知のとおり。それは頂上に阿彌陀如来（救済）・観音菩薩（慈悲）・勢至菩薩（智慧）がおられると考えられたからである。

『極楽浄土そのもの』

明治までは神仏一体で、富士も仏教の聖地であった。山頂に立ち、ご来光を仰ぐと霧や雲がかかるとき、後ろに『ホトケ』が出現する。もちろん今はブロッケン現象と言われているが、昔の人は、それこそ仏さまが現れたと考えたのだ。しかも光の関係で後に『光輪』ができ、なんと『手を合わせて』おられる。もちろん自分の影なのだが、素直に仏さまに会えたと、人々は感動したのである。

阿彌陀さまなど、仏さまに会えるのは『あの世』すなわち極楽浄土。それを富士山頂では『生きたまま』拝めるのである。



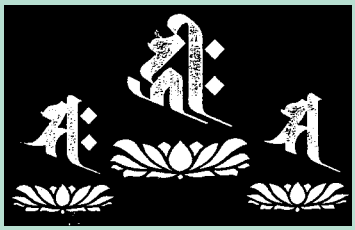
『県大からの富士は日本一』

こうして、富士登山が盛んとなり、富士講もできる。絵画として『富士曼陀羅』が室町期から盛んに描かれる。あのお風呂屋さんの湯ブネの背後に描かれるペンキ絵ももちろんそれ。これを見ながら『極楽！極楽！』という仕掛けだ。

ところが、山頂に登らなくとも地上から『三人の仏さまに会える場所』がある。それが静岡県立大学なのである。よく見てほしい、『山頂が三つに見える』はず。すなわち、わが県大は『生きたまま極楽浄土と三人の仏さまのおられる処』が見える大学なのである。素晴らしい景観にあるというのもそのためである。『富士のくに・静岡』のなかで一番感動する景観は、ここからなのである。なんとも嬉しいことではないか！

なお、私は、本年3月末をもって定年退職となるため、この連載は、今回で最後となります。長い間、御拝読いただきありがとうございました。

（国際関係学部教授・高木桂蔵）



〈阿彌陀三尊〉

サ　観世音菩薩……慈悲

キリーク　阿彌陀如来……救済（キリク）

サク　勢至菩薩……智慧

〈谷田風土記・連載終了に寄せて〉

「谷田風土記」の執筆者である高木桂蔵教授は本年3月末をもって定年退職となるため、この連載は今回で最後となります。この「谷田風土記」は、平成５年2月3日発行の本誌第3号から、14年の間、実に93回にわたり連載をしていただきました。ここに、長年の御執筆に対し、心から感謝を申し上げます。

先生の御健勝を祈念致しますとともに、先生には今後も「谷田」の地に位置する本学を温かく見守っていただきたいと思っております。

（広報委員長　出川　雅邦）

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ（管理棟2階）あてにお願いします。E-mail:kikaku3@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会（事務局　ＴＥＬ　０５４－２６４－５１０３）
静岡県立大学ホームページアドレス ： http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています